音楽によるアウトリーチ実践報告及びアウトリーチの意義についての考察
―公共ホール音楽活性化事業　平成23年度　宮城県多賀城市公演―

乗　松　恵　美

A practical report of music outreach program and its meanings.
―“Public music hall activation project” Tagajo, Miyagi 2011―

Emi Norimatsu

This report explains the process of the music outreach programs. This includes a summary of the “public music hall activation project” organized by the Japan Foundation for Regional art, and practical report on an experimentation of music outreach programs applied in the city of Tagajo in January 2011. This paper explains the procedure for preparing music outreach programs for community groups, senior care homes, elementary schools and how to prepare for a recital. A musician’s view of the music outreach programs, is also included.

キーワード
音楽によるアウトリーチ Outreach by music
地域音楽活動 Musical activity in the region

所属
広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences　音楽学科 Department of Music

はじめに

アウトリーチとは

アウトリーチ（Outreach= 手をさしのべる）元々福祉分野で訪問介護，出張医療などの奉仕活動を指す用語であったが，研究機関，公共機関等が機関外への出張，あるいは機関内を公開して専門分野を一般に普及する活動を指すようになった。芸術，科学分野，特に日本国内の芸術分野では音楽，演劇，ダンス等が挙げられる。本稿で示すアウトリーチとは，音楽によるアウトリーチ活動を指す。

Ⅰ．音楽によるアウトリーチの意義について
研究動機　～演奏者の目線から～

現在，「音楽によるアウトリーチ」という言葉が普及しはじめ，注目が集まりつつある。文化庁による芸術家派遣事業等に代表される一般的な学校公演等にみられる，全校生徒を一度に対象とする学校訪問演奏と一線を画した表現として，演奏形式の１つとして認知されつつあるアウトリーチだが，未だ「単純な曲解説を付けた演奏会」との違いは明確でない。「演奏者と対象者」を対等の関係に考え，観客への一方的な演奏提供とならぬよう，双方向のコミュニケーションをとりながら進めることがアウトリーチプログラムの大きな特徴のひとつと言える。筆者自身，2008年に初めてアウトリーチという形で演奏実施した時には苦慮したものの，対象者に則したプログラムの構成と演奏に対する観客の反応，すべてが新しい発見に満ちていた。そして，それまで演奏を主とした企画のコンサート中心の音楽活動を行ってきた筆者自身にとって，音楽を通して社会と関わって生きていく，より深い方法を得たように感じた。その後，日本におけるアウトリーチの先駆である財団法人地域創造の公共ホール音楽活性化事業

に，オーディションを通過し登録アーティストとなり，現在も実践研修を行っている。（同事業については次章で詳細を記す）

本学では音楽学科必修授業として「音楽によるアウトリーチⅠ，Ⅱ」を開講しており，筆者は講義のための実地研修の一環として個人的に各所に出向くほか，幾つかの事業に現在も参加を続けているが，実践を通して筆者が考察する音楽家としてアウトリーチを実施する上で最重要な点に，以下の３点が挙げられる。

① 実技の力
② プログラム構成力
③ 実施先での柔軟な対応力

①については本学音楽学科が長年の指導実績として積み上げて来たものであり，現在も継続されているものである。順不同になるが，③については個々の性格もあるものの，実践を積むことで伴ってくるものであろう。

筆者が最も価値があると考察するのは，②のプログラム構成上で必要不可欠なこととして「自己分析＝自身（あるいは楽器）の特性を知り，その特性を発揮するには何が適切かを知ること」「相手の分析＝対象（あるいは主催者）が何を望み，要望に応えるにはどのような方法があるか知ること」である。これらは，現代の大学生世代に必要とされる能力であると共に，社会のマーケティング手法の基礎でもある。音楽によるアウトリーチを通して得られるものは，対象先の児童・生徒世代の教育プログラム一環への寄与だけではなく，音楽家が社会で生き残っていくために，実技能力と両輪となって必要とされる，自己をプレゼンテーションし，顧客を開拓していく能力を養うことである。またアウトリーチの準備段階での，自己を省み分析し，相手を知り，その要望に応える為に何が必要であるかを考えるこの手法は，音楽以外の分野でも必要とされる能力であると言えよう。音楽と関わって生きていこうとする学生たちに，形はそれぞれであっても，自身と音楽との向き合い方を知る手段として，また社会人として生きていく上で，アウトリーチ活動を通した経験に寄せられる期待は大きい。

本稿では，音楽によるアウトリーチが日本に普及していった経緯と，筆者自身が国内各所で行った音楽によるアウトリーチ活動実践例の１つで，公共性が高く他者の客観的な視点が得られると思われる，昨年度実施した財団法人地域創造の公共ホール音楽活性化事業の実施報告を行うと共に，公共施設・団体にとって，また演奏家個人にとってのアウトリーチの意義について考察する。

Ⅱ．日本における音楽によるアウトリーチ事業の経緯

１．地域創造アウトリーチ事業「おんかつ」

財団法人地域創造による公共ホール音楽活性化事業（通称おんかつ）は，平成10年度にスタートし，現在も継続中の事業である。始動の背景として，本格的なクラッシックコンサートの可能な公共ホールが全国各地に整備されたものの，芸術文化に馴染みの薄い地域では，水準の高い演奏会を企画しても観客動員数確保に苦戦する実情が各地から伝えられていたことがある。また新進のアーティストたちがその才能を発揮し世間に認知され，芸術性を認められる機会が少ないことは芸術分野の永続的な課題としてあげられる。

これらの背景を元に，（財）地域創造の支援により，若手の有能な演奏家を各地のホールに派遣し，公共ホールの運営を活性化すること，新進の演奏家の研鑽の場を与えることを目的とした「おんかつ事業」がスタートする。

しかし，演奏家を派遣するのみで公共ホールの運営が活性化されるとは限らず，むしろ新進のアーティストでは演奏会そのものの成立さえ危惧された。そこで，彼らの選択した手法が，当時米国などで活発に行われるようになっていた「アウトリーチ」と「公共ホールでの演奏会」を組み合わせることで新たな活路を見出す，というのがこの事業の基本方針となり，現在も事業の骨格として受け継がれている。

折しも，同事業開始後の平成13年に公布施行された文化芸術振興基本法では，以下のように制定された。

「文化芸術を創造し，享受し，文化的な環境の中で生きる喜びを見出すことは，人々の変わらない願いである。また，文化芸術は，人々の創造性をはぐくみ，その表現力を高めるとともに，人々の心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し，多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり，世界の平和に寄与するものである。」（同法序文より）[1)]

「文化芸術の振興に当たっては，文化芸術を

創造し，享受することが人々の生まれながらの権利であることにかんがみ，国民がその居住する地域にかかわらず等しく，文化芸術を鑑賞し，これに参加し，又はこれを創造することができるような環境の整備が図られなければならない。」（同法２条３項）[1)]

「文化芸術の振興に当たっては，地域の人々により主体的に文化芸術活動が行われるよう配慮するとともに，各地域の歴史，風土等を反映した特色ある文化芸術の発展が図られなければならない」（同法２条６項）[1)]

「地方公共団体は，基本理念にのっとり，文化芸術の振興に関し，国との連携を図りつつ，自主的かつ主体的に，その地域の特性に応じた施策を策定し，及び実施する責務を有する。」（同法４条）[1)]

文化芸術は社会生活に有益であり，我々は等しく享受する権利があるとする「文化権」という考え方が普及し始めたが，音楽分野においては，数十年前から，クラッシック聴衆人口は１％という論が定説とされている。文化権普及以降，残りの99％の人々にも価値を感じてもらう説明責任の必要性が語られ始める。

このような世情の中で，米英を中心にスタートしたアウトリーチという手法に注目が集まり，その有益さが広く認知されることになり，同事業の必要性・ニーズは急速に高まっていった。

「おんかつ」基本理念

「おんかつ」各事業は，あくまで公共ホールを主体とし，（財）地域創造からの種々の助成により実施される。原則として４回のアウトリーチ（「おんかつ」ではアクティビティと名付けられているが，本稿ではアウトリーチの名称で統一する）と１回のホールコンサート，計５つのプログラムを組み合わせて創る事業である。そのため，公共ホールの一般的な鑑賞型コンサートよりも多様な成果･効果が期待される。その成果・効果を最大限に発揮するために，以下５つの考え方を基本理念としている。

⑴　地域の団体や施設，住民との新たな回路を構築する

音楽愛好家や音楽活動に参加している住民よりも，ホールに足を運ばない住民，関わりが希薄な地域コミュニティと向き合うことが重要である。特にアウトリーチでは，普段はホールとの関係を持たない機関とのネットワークを築くことで，ホールと地域コミュニティの良好な関係が生まれ，公共ホールを拠点とした地域内のネットワークを形成機能させることにつながる。

機関対象例①　幼稚園，学校
②　病院，福祉施設，保育所
③　地元産業，商店街，観光施設
④　市町村庁舎，図書館，美術館，博物館

⑵　歴史や伝統，自然環境，優れた人材など，地域資源を再発見する

地域の歴史的な建物や文化財，自然環境を，アウトリーチを通して市民の交流の場とする。ホールの外に出てアウトリーチを行うコミュニティプログラムは，地域の歴史や伝統文化を再発見することでもあり，新たな文化資源，地域が抱える様々な課題を発見することにもつながる。また，アウトリーチを行う過程においては外部団体や機関との協力連携の中で，地域のキーパーソンや優れた人材との協働が生まれる。歴史や伝統，自然環境などは重要な地域資源であり，コミュニティプログラムの充実には，そうした資源を公共的な空間として活用する可能性がある。その過程で培われたホールと地域との貴重な財産となる。コミュニティプログラムは，地域における芸術の役割を再発見することでもある。

⑶　コミュニティプログラムとコンサートを効果的に連携させる

コミュニティプログラム（音楽を通じて地域と交流するプログラム）とコンサート（身近で親しみやすく，かつ本格的なコンサート）は，同事業の両輪であり，両者の連携やバランスに配慮した企画制作が求められる。コミュニティプログラムでは，ホールから地域に出て行うアウトリーチが多いため，企画制作の労力がコンサートよりもコミュニティプログラムに集中する傾向がある。しかし本来の公共ホールの機能は，素晴らしい音楽や演劇，ダンスなどの鑑賞の機会を，それらに最もふさわしい場＝公共ホールで住民に提供することを念頭に置いた上での全体のプログラム構成が必要不可欠となる。コミュニティプログラムの成果は，コンサートの集客人数だけではなく，未開拓の住民の興味関心を喚起し，音楽プログラムに対する理解を深めることで，観客層がどれだけ多様になったか，

ホールとアーティストと市民の間にどんな新しい関係が生まれたのか，そうしたことも非常に重要な成果の指標である。

(4) 明確な目標を定め，創造性あふれる独自プログラムにチャレンジする

同事業の企画には既定の内容はない。実施するホールや地域の特徴，アーティストの資質や個性，ホール担当者のアイディアが具体的なプログラムに反映される。事業実績の蓄積の中で定番のプログラムは定着しつつあるものの，前例の模倣ではなく，明確な目的をもって独自性を打ち出した企画の立案・実施を目指す。一方で企画の斬新さを求めすぎると，目標から逸脱してしまい，特にアウトリーチでは「どこで」「どのように」といった場所や演出効果に目を奪われ「何を」「誰に」伝えたいのかを忘れがちである。個々のアウトリーチはユニークでも，事業全体として散漫にならぬよう，明確な目標を定め，アーティストの創造性や地域のポテンシャルを生かしながら独自の企画を観客や地域住民に確実に伝える必要がある。

(5) 継続が公共ホールの支持層を広げ，未来を切り拓く

多くの同事業実施団体が実施後に気が付くことは，同事業のようなコミュニティプログラムが効果を生み出すためには継続が必要だということである。地域には芸術に無関心な市民や未体験の市民が多く存在する。そのような市民に対してコミュニティプログラムを継続的に提供することで，芸術に対する関心を持ち，潜在顧客となる市民層が生まれてくる。そうした市民が，やがては観客やワークショップ参加者，ホールに足を運んでくれる可能性へとつながっていく。同時に，コミュニティプログラムの積み重ねによって，地域における文化施設の存在意義や重要性を理解する住民の輪が広がっていく。こうして，従来のホール観客や利用者以外の文化施設支持層が増大し，文化施設の運営を支える地域の基盤となり，ひいては文化芸術の発展へもつながっていくのである。

「おんかつ事業」のアウトリーチとホールコンサート

アウトリーチの手法を大まかに分類すると「聴く」「参加する」「体験する」の３つのタイプに分けられ，さらに，手法やスタイルによって３つの代表的な類型に整理することができる

(1) ミニコンサート（学校訪問，福祉施設等，美術館・図書館・コミュニティ施設等）

① 内容

通常のコンサートとは違った空間で対話的な解説を交えながら，親しみやすく，リラックスした雰囲気で進めることが多い。対話重視を目指すため，３つのSmallを原則としている

・小さな空間…演奏者と参加者の距離を縮めることで微妙な演奏行為が見え，お互いの息遣いが感じられるようにする。

・少ない人数…アーティストと向かい合う観客の人数が多すぎないこと。演奏者と参加者一人一人との双方向のコミュニケーションを目指すため。

・短い時間……１曲の演奏時間や１つのアウトリーチプログラムの時間が短いこと。必ずしも音楽に興味を持っているとは限らない参加者にとって，集中力を持続できる時間は長くない。

② 効果

音楽を身近なものにし，新たな観客層の発掘に効果があると考えられる。また，継続することでホールへの支持層を広げ，ホールの存在意義や重要性を理解する住民の輪が広がることが期待される

③ 課題

雰囲気やシチュエーションに目が行き過ぎ，本来のコンセプトから逸脱してしまうケースがある。単なる集客目的のイベントに陥らないように注意すること，コンサート（本公演）との差異を明確にすることなどが課題と言える。

(2) 一般市民のためのワークショップ

① 内容

アーティスト＝演奏する側，参加者＝聴く側という一方的に演奏される音楽をただ鑑賞するのではなく，楽器に触れて演奏を体験したり，声や身体を演奏のツールにしたり，あるいは身近にある素材から楽器を捜索するといった参加型のプログラムである。ワークショップ参加者の資質や個性，その地域，施設，学校ならではの素材を生

かしたアイディアを出して内容を考えていく。演奏者と参加者とが双方向の関係で音楽の魅力や楽しみ方を参加者自らが発見するような仕掛けや進行が必要となる。そのため，ワークショップの進行役（演奏者，あるいはホール関係者）はそれらを実現可能にするアイディアを発案し，参加者とコミュニケーションを取りながらスムーズに進行することが求められる。

② 効果

参加・体験型の活動を通して，新しい音楽の楽しみ方を伝えることで，音楽のファン層を広げ，その後の事業展開に期待が持てる

③ 課題

アイディアやノウハウ，成果目標（到達地点）の設定，情報収集，演奏家と対象者のコミュニケーションなど，アウトリーチプログラムの中でもチャレンジ性が強い企画で，かつ準備作業に労力を要する

(3) アマチュア音楽家のためのワークショップ

① 内容

合唱や吹奏楽など，学校のクラブや地域のサークル，または演奏活動をする人を対象とし，演奏技術や練習の手法，演奏に際しての心がけなどを教授することが多い。プロの演奏家からのアドバイスを直接受けて，その場で目を見張るようなレベルアップが実現した例もある。こうした経験は，参加者にとって生涯忘れられない記憶となり，音楽家育成のきっかけとなる可能性もある

② 効果

音楽活動の裾野の拡大や，ホール利用団体の活性化などに期待が持てる

③ 課題

ワークショップの目的や指導の内容・方法など，指導にあたるアーティストとホール，参加者の間で共通認識を持っておく必要がある

これらのアウトリーチをふまえて，各事業を締めくくるのが主催地域ホール，つまり「わがまちのホール」ならではの本格的なホールコンサートである。アーティストが実力と芸術性を最大限に発揮できるような時間と空間を観客と共有することを目指す。

コミュニティプログラムからの効果的な連携を目指すため，コンサートの内容も，音楽に馴染みの薄い人々にも多様な回路からアクセスできるような工夫や演出が望まれる。選曲，曲間のMC（トーク）や演奏中の照明などがあげられる。

「おんかつ」の目的と意義

全国各地で同事業において多様な実践が行われるにつれ，同事業は当初予期した以上に幅広い効用をもたらし，公共ホールの運営にとって大きな意義があることが明らかになっていった。公共ホールの目的や地域の特性が一様でないように，事業の具体的な目標はホールごとに多様であるべきとした上で，（財）地域創造は実践の10数年を振り返り自らの目的と意義は，以下の３点に集約されるとしている。

「音楽と住民との幸福な出会いの創出によって
・地域と住民に活力を与えること
・公共ホールを活性化すること
・音楽芸術と音楽家を活性化すること」[2) 4]

上記３点についての成果は以下のように報告されている（順不同，引用文献記述順に準ずる）

公共ホールにとっての「おんかつ」

おんかつのコンサートでは，アウトリーチで訪問した学校の児童や生徒が，母親や父親と連れ立ってきたり，ワークショップの参加者が聴衆に交じっていたりする例が少なくない。程度の差はあるが，コンサートの前にアウトリーチを実施することで，いきなり本番のコンサートだけを実施する場合より，聴衆の数は確実に増大していると思われる。しかしこうした現象だけをおんかつがホールにもたらす効果だと考えたのでは，おんかつの本質を見失ってしまう。おんかつをきっかけに初めてホールを訪れた住民が，聴衆として根付くためには，おんかつのような取り組みを長期的な視点から繰り返していく必要がある。それでも，実際にホールの聴衆となるのはアウトリーチの参加者の一握りなのかもしれない。その一方で重要なのは，アウトリーチには参加したけれども，ホールには足を運ばなかった住民の存在である。コンサートの聴衆をホールの側が選択することはできないが，アウトリーチではすべての住民が対象となりうる。つまり，おんかつによって公共ホー

ルのサービス受益者は格段に広げられるのである。しかもアウトリーチを体験した住民には，ホールの存在，そしてその活動の意義を大なり小なり理解してもらえる。自分自身が音楽や演劇を鑑賞しなくても，公共ホールが地域にとって重要な存在である，ということがより多くの住民に認識されるのである。小学校であれば，児童だけでなく教師やPTAにも，福祉施設であれば入所者の家族などにも，公共ホールへの理解が広がるだろう。サイレント・パトロンとでも呼べるこうした住民の支持層の拡大が，ホール運営の確固たる基盤となり，活性化の原動力になりうると考えられる。また，おんかつを通じてホールの企画制作力が高まることは言うまでもない。おんかつの全体研修，個別研修，事業の実施，そして報告書の提出というプロセスや，コーディネーターの指導や助言は，ホール担当者にとって貴重な訓練の機会となっており，その点からもおんかつは公共ホールの活性化に寄与している。[2）25]

音楽芸術と音楽家にとっての「おんかつ」

おんかつは，若くて有能な演奏家を発掘し，彼らの能力を鍛え，高めるという点でも，大きな成果を残してきた。それは，演奏技術の面だけではなく，音楽や演奏を聴衆に伝える力や経験，音楽に興味のない住民や既成概念にとらわれない子どもたちとも，音楽や時にはおしゃべりを通してコミュニケーションできる能力，いわば“演奏家力”とでも呼べるものである。チケットを買って演奏会に訪れる聴衆は，コンサートを楽しみたいという気持ちで，音楽を聴く準備のできた住民だ。しかしアウトリーチ先で対面するのは，音楽を聴こうという積極的な意識もなければ予備知識もない住民や子供たちである。そうした聴衆を相手に，自分の演奏や音楽を伝えることは，若い演奏家にとって普段は得られない訓練の場となっているはずだ。しかもおんかつではアウトリーチとコンサートがセットになっていることで，演奏家にとっての総合的な能力が求められるのである。実際，おんかつを何度か経験した後では，演奏に対する柔軟性や社会的な認識の幅が広がった演奏家も少なくない。そしてアウトリーチでは，演奏家の活躍できる場所をホールの中だけではなく，学校や老人ホームなどの地域のあらゆるところに広げてきた。演奏家の本来の職能が，コンサートで素晴らしい音楽を聴衆に届けることだとすれば，おんかつによってその職能の幅は大きく広がったと言える。才能に恵まれ，特別な訓練を受けてきた演奏家が，その力を社会に還元できる場は，ホールに限られているわけではない。地域と音楽や演奏家との接点の広がりは，おんかつの10年間によって立証されている。それらの接点が，教育や福祉の現場であることを考えれば，おんかつは音楽そのものの存在価値，そして演奏家が活躍できる領域を，従来と比べ物にならないほど増大させてきた，と言える。それは，音楽の公共性の獲得であり，演奏家の新たな社会的役割の創出を意味している。[2）26]

地域や住民にとっての「おんかつ」

おんかつによって演奏家の活躍の場が広がったということは，公共ホールがサービスを提供できる対象や機会が拡大したことでもある。アウトリーチの現場では，ライブな演奏に引き込まれる子供たちの輝く目，生きる喜びや活力に満ちた高齢者の表情に接することが多い。そして，優れた演奏会の後，ホールには聴衆の得難い満足感の空気が漂っている。演奏家のクリエイティブな発想や音楽の力が，子供たちの想像力や創造力，感性を刺激し，高齢者の元気回復を促し，そして聴衆の心をとらえたからである。このように公共ホールの役割は，文化・芸術の分野だけではなく，教育や福祉，まちづくりなどの分野にまで拡大している。それぞれの分野で音楽が有効に機能し，幅広い住民に活力をもたらしている。おんかつに取り組むことで公共ホールが地域の拠点を音楽で結びつけ，地域全体の活性化に寄与しているのである。言わばおんかつは，音楽が日常の中に溶け込み，地域に根付くための，音楽への参加の多様な回路を構築する取り組みである。地域において，音楽と触れ合う環境の多様性と豊かさが，その町に生まれ，育ち，暮らし続けることの喜びや誇りを与えるようになる。それこそが地域における活力の創出であり，おんかつの最終的なゴールといえるだろう。そしてその原点は「音楽を聴く」ということにある。小学校であれ，高齢者福祉施設であれ，もちろんコンサートホールであっても，音楽を聴く環境を作り，音楽の力をどの程度伝えられるか

がおんかつの成否の鍵を握っている。おんかつの理念を突き詰めれば，「すべては音楽との幸福な出会いに始まり，そしてすべては音楽との幸福な出会いのためにある」のかもしれない。[2）26]

「おんかつ」事業概要

⑴　事業趣旨・目的
・創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを図る
・地域の公共ホールの自主企画，自主制作による公演を目指す

⑵　事業内容
・公演事業（ホールコンサート）
　原則として１公演。公共ホールで開催
・交流事業（アウトリーチ，ワークショップ）
　地域との交流を図る事業で，原則として公演事業実施前の２日間で４回（１日につき２回）実施

⑶　財団法人地域創造の主な支援内容（対公共ホール）
・アーティスト派遣
　全国オーディションで選ばれた事業登録アーティストの派遣
　対象アーティストは，事業登録アーティストたちによる事前プレゼンテーションにより，事業主催公共ホールが希望アーティストを選定
・コーディネーター派遣
　実践的なノウハウを習得する機会を提供するとともに，事業の円滑な運営を図るために，企画制作経験の豊富な専門家をコーディネーターとして現地に派遣

⑷　入場料
　アウトリーチ……無料
　ホールコンサート…有料　入場料収入は事業実施団体に帰属

以上が，財団法人地域創造による公共ホール音楽活性化事業のあらましである。次項以降は，筆者が2010年度事業に登録アーティストとして同事業に参加した内容についてのまとめである。

２．2010年度おんかつ事業　事前プレゼンテーション

同事業事前プレゼンテーションは，既述の通り，おんかつ事業実施予定の公共ホール関係者を対象として，公募オーディションによって選定された登録アーティストたちによって行われる。各公共ホールが，「わがまちのコンサート」に望ましいと思われるアーティストたちを自らで選定する。

2010年度おんかつ事業事前プレゼンテーション概要

⑴　日時　2010年４月15日（木）14：00開演
⑵　会場　津田ホール
⑶　2010年度おんかつ事業　実施団体(20団体)
　岩手県一関市　一関文化センター
　宮城県多賀城市　多賀城市民会館
　宮城県塩竈市　塩竈市遊ホール
　秋田県八郎潟町　八郎潟町農村環境改善センター
　茨城県笠間市　笠間公民館
　栃木県栃木市　栃木市太平文化会館
　千葉県浦安市　浦安市文化会館
　東京都狛江市　狛江市民ホール
　新潟県柏崎市　柏崎市産業文化会館
　長野県箕輪町　箕輪町文化センター
　岐阜県飛騨市　飛騨市文化交流センター
　愛知県田原市　田原文化会館
　和歌山県上富田町　上富田文化会館
　広島県熊野町　熊野町民会館
　愛媛県上島町　せとうち交流館
　高知県須崎市　須崎市立市民文化会館
　高知県香南市　のいちふれあいセンター
　佐賀県佐賀市　佐賀市交流プラザ　交流センターエスプラッツホール
　佐賀県鳥栖市　鳥栖市中央公民館
　大分県玖珠町　くすまちメリサンホール
⑷　出演アーティスト（楽器種）10組
　ピアノ，ヴァイオリン２名，チェロ，フルート，サクソフォーン，パーカッション＆ボイス，ソプラノ（筆者），箏デュオ，サクソフォーン四重奏
⑸　各アーティスト　プレゼンテーション時間
　一人当たり20分（出入，MC 含む）

このプレゼンテーションで筆者がテーマとしたもの
・「歌」の特性
　様々な楽器種の中で，演奏と同時に言葉を直接扱うことができるのは歌のみである。言葉＋音楽のもつ表現と聴衆に与えられるイメージの拡がりの可能性を最大限の PR ポイントとした。

・地方在住者だからこそ伝えられること

演奏家として研鑽を積みつつ生きるには，中心都市に在住する方が情報量，実践の場数，水準の高い共演者との出会い，あらゆる面において有利であることは定論とされているが，本人次第で地方在住であっても水準の高い演奏技術は保つことができる。また，同事業の対象となる派遣先はやはり同じ地方都市である。地域密着の生活という同じ環境に身を置いてこそ見出せる地域で生きるための特性を共に探したいという意思を示した。

実際のプログラムは以下の通りである。

表１　プレゼンテーションプログラム

合計時間	内容		
2分	**曲解説（2分）**	**朗読**	**こうさく少年のお話　導入　～赤とんぼ**
		内容	歌詞に沿った筆者創作の物語朗読による曲解説（一部）
		目的	①単純な曲解説ではなく，物語形式にすることで聴衆に曲の歌詞の内容を知り，日本歌曲がもつ物語性のイメージを膨らませる手助けとする ②ホールコンサートプログラムの１部分としての筆者特有の特徴あるプログラムの提案
4分	**演奏（2分）**	**歌唱**	**山田耕筰作曲　赤とんぼ**
		内容	事前解説により改めて内容イメージを膨らませた上での曲鑑賞
		目的	よく知られた楽曲ではあるものの，改めて各節の言葉の意味や物語の進行を知った上での曲鑑賞
		（課題）	解説がある上での曲鑑賞はイメージがし易い反面，観客の鑑賞感想を誘導することにつながり，楽曲への自由感想の方向を失わせることになる可能性がある。
		（解決策）	基本的に史実としての解説を行うが，逸脱した部分については，筆者自身の解釈であるという注釈を入れておく
8分	**自己紹介（4分）**	**MC**	**自己紹介と共演者の紹介**
		内容	二人とも広島在住であり，故郷への愛着があること，自分と音楽への思いを語る
		目的	地方都市在住者として，地方都市の地域を活性化する夢を共に実現したいという意思を伝える
		（課題）	依然として都市圏から来る演奏者に対する観客のブランドイメージは強い。主催ホールとしてはコンサート集客という運営観点から，中央都市在住演奏者を望む傾向がある
		（解決策）	確かな演奏技術を実感していただける演奏準備を十分にしておく
10分	**曲解説（2分）**	**MC**	**オペラカルメン“ハバネラ”　曲解説**
		内容	カルメンの簡略なストーリーと，オペラというジャンルを紹介。歌詞は台詞であるため，音楽と共に登場人物としての演技が付くと知らせる
		目的	筆者の演奏者としての特性であるオペラ楽曲の演奏を聞かせる前準備
13分	**演奏（3分）**	**ピアノ伴奏による歌唱＋カスタネット演奏　ビゼー作曲　オペラカルメンより“ハバネラ”**	
		内容	カスタネット演奏を含む，演技つきの歌唱。客席を回りながらの歌唱
		目的	①オペラ登場人物としての演技を加えた歌唱によって，客席の観客を演技の中に取り込み，観客の舞台参加疑似体験 ②キャラクターを歌い分けする筆者特有のホールコンサートプログラムの提案
		（課題）	①オペラ本編にはこの楽曲でのカスタネット演奏はない。 ②観客を登場人物として巻き込むプログラムの場合，どの程度観客から反応が返ってくるかは未知数のため，逆効果となる場合もある
		（解決策）	①解説時に説明しておく ②反応が大きすぎた場合，無反応だった場合の双方の対応策を事前に用意しておく
15分	**解説（2分）**	**MC**	**蝶々夫人と自分**
		内容	曲解説はほとんど行わず，筆者自身のこの演目を通した体験を話す
		目的	あえて曲解説を詳細に行わないことで，プッチーニの音楽本来が持つ力を体感してもらう
20分	**演奏（5分）**	**ピアノ伴奏による歌唱　　プッチーニ作曲オペラ蝶々夫人より“ある晴れた日に”**	
		内容	オペラ登場人物としての多少の演技を伴う歌唱
		目的	①演奏者としての，確かな演奏技術を改めて伝える ②前曲の登場人物と真逆のキャラクター歌い分けによるホールコンサートプログラムの提案 ③筆者らしさとアーティストとしての自身の資質が最も発揮出来ると思われる楽曲の選択
		課題	細かな歌詞解説がない中での曲鑑賞となるので，演奏水準が観客の満足いくものとならなければ，これまでの曲の長さと比べ，演奏時間を長いと感じさせてしまう
		解決策	十分な演奏準備あるのみ。演奏家としての本分は，解説が出来ることではなく，本来演奏技術の高さであると筆者は考える

上記プログラムの実施により，同年度事業実施先は宮城県多賀城市からの依頼を受けることになった。依頼先の多賀城市担当者の方は本事業に対し以下のような動機を報告されている（同事業報告書による）

・応募の動機，事業のねらい
　市民会館によるアウトリーチ事業に関心を持ち，ホールに足を運べない方々や子どもたちに音楽を届けたいという思いと今後の事業のきっかけづくりのために応募しました。
・企画のポイント
　乗松さんのプレゼンを聴いて真っ先に感じたことが「女性を元気にする」だったことから，子育てや介護で自分の時間がもてない方を対象に笑顔で家庭に帰ってもらえる企画をしたいと考えました。また，子どもたちには音楽（歌）の楽しさ，声のすばらしさを感じてほしいと考えました。

事前プレゼンテーション後に事業実施先が決定すると，公演前に担当コーディネーター，地域創造担当者，主催ホール担当者等により，実施先の事前下見が行われる。実施先については，ホールでのコンサートの他，アウトリーチの実施先として学校や病院，福祉施設をはじめ，自治体や地域の様々な機関・団体などが考えられる。このような諸機関に対して，アウトリーチ活動について理解してもらうための働きかけが必要であり，事業を実施する上で，まず主催である公共ホールが，同事業でのアウトリーチの実施先（受け入れ先，実施場所）やアーティストとの多元的ネットワークを構築しておくことが必要となる。その上で，実施先とアーティスト双方のニーズを把握し，双方の梯となるのが，担当コーディネーターの重要な役割である。

調査報告を元に，アウトリーチ活動の観客（実施先によって異なるが，子ども・入院患者・高齢者・障害者・一般市民等）にとって最も効果的であると思われる実施方法を立案・採用するための公演前事前アーティスト打ち合わせが行われる。

3．公共ホール音楽活性化事業　多賀城市公演

公演概要

表２　平成23年度　おんかつ多賀城公演概要

主催団体名	多賀城市・多賀城市民会館文化事業協会			
施設名	多賀城市民会館		ホール名（キャパ）	小ホール（458席）
担当者名	所　属	市民会館	企画制作担当者	瀧口　光江
連絡先	多賀城市中央２-27-１			
ＴＥＬ	022-368-0132		ＦＡＸ	022-368-0132
メールアドレス	info@tagajo-cityholl.com		携帯番号	

公演情報					
事業タイトル	乗松恵美ソプラノリサイタル				
アーティスト名	乗松恵美，北林聖子				
マネジメント名	ミリオンコンサート　岩永直也，和田健美				
コーディネーター	山本若子，枡田尚子，友田尚武				
時期	平成23年１月20日　～　平成23年１月22日				
公演内容	日程	時間	場所	対象者	内容
アクティビティ①	2011年１月20日（木）	11:00～11:50	いとぐるま（市民会館小ホール）	成人（40人）	ミニコンサート
アクティビティ②	2011年１月20日（木）	14:30～15:20	恵愛ホーム	入所者（30～40人）	ミニコンサート
アクティビティ③	2011年１月21日（金）	①11:20～12:05 ②13:50～14:35	多賀城八幡小学校	①６年１組（34人） ②６年２組（34人）	ミニコンサート＆ワークショップ
アクティビティ④	2011年１月21日（金）	13:50～14:35	多賀城八幡小学校	６年２組（34人）	ミニコンサート＆ワークショップ
コンサート	2011年１月22日（土）	14:00	市民会館　小ホール	入場料金：	一般　1,000円 高校生以下　500円

4．アウトリーチ実践報告（事前準備と実践）

(1)　いとぐるまアウトリーチ

表３　いとぐるま概要と事前報告

いとぐるま　アウトリーチ		実施先名称：いとぐるま（市民会館小ホール）		下見日時：11／５（金）　16:30頃	
項　　目	記　　入　　欄				備　　考
内　　容	タ イ ト ル	ミニコンサート～いとぐるまの皆さんとともに			
	期　　日	2011年1月20日（木）	時　　間	11:00～11:50	
	対象（人数）	成人（40人）	会　　場	小ホール	40代～70代 主に女性
実施先 雰囲気　など	「いとぐるま」は認知症高齢者と家族を支える会として平成５年に発足しました。月１回の例会では，講話や体操，季節の催しを行ったり，懇談の場を設けたりしています。介護を経験した方や今現在，介護の日々を送っている方など様々ですが，会に参加することで元気をもらい皆さん明るく，前向きに介護や支援に取り組んでいらっしゃるようです。				
担当者からの 希望・要望など	リクエスト曲：アメージンググレース，みかんの花咲く丘 クラシック音楽に触れる機会が少なく，敷居の高いものだと思っている方もいるので，これを機会に親しみを感じてもらいたい。 夢のある舞台にしたい。ドレスを着てもらいたい。				

企画目標

団体の性質を考慮し，家族の介護を終えた方々もおられるということで，対象者（会員）がダイレクトにご自身の家族を思い出させるような内容に触れるのではなく，筆者自身の家族との思い出を語ることで，自らの思い出等を回顧してもらい心癒す時間を提供することを目指す。事前調査にみられるクラッシックの敷居が高いという意識を，途中に曲の中に参加してもらうことで身近に聞いていただけるよう誘導するプログラムを立案。「聞く（受動）⇒参加（舞台同化）⇒歌う（能動）」へつなげていく。また，本プログラムにより「歌う」人口が増えていくきっかけづくりとすることで，観客としてのホール利用者増加だけでなく，アマチュア音楽家としてホール使用顧客開拓の道筋づけも目指す。

上記の事前調査による報告打合せの結果立案の企画目標を柱に，実際に以下のプログラムを実施した。

表４　いとぐるまアウトリーチプログラム

時間目安	内容			
11:00	**オープニング**	**（３分）**	**歌唱**	**早春賦**
			内容	季節にあった曲
			目的	コンサートオープニングに，自己紹介も兼ねた演奏
	自己紹介	**（２分）**	**ＭＣ**	**自己紹介と共演者の紹介**
			内容	簡単な自己紹介。出身地広島の話等
			目的	演奏のみでなく，話すことでアーティスト（筆者・共演者）の為人を知ってもらい観客の側の緊張を緩和する
11:05	**曲解説**	**（３分）**	**ＭＣ**	**山田耕筰　からたちの花　解説**
			内容	北原白秋の幼少期の体験を基に書いた詩に，山田耕筰が自身の少年時代を重ね合わせて作曲したというエピソードを話す
			目的	曲への理解を促す

	日本歌曲①	**（2分）**	**歌唱**	**山田耕筰　からたちの花**
			内容	演奏
			目的	①観客の幼少期と近い，清貧であった時代の曲を味わうことで観客自身の幼少期回顧を促し，曲の物語の流れの中に自身を見出すことで心癒され，コンサートの世界への集中力を高める ②ホールコンサートの演奏曲としてのプレゼン効果を狙う
			（課題）	演奏の都合上，アーティスト（筆者）の声質に対し音域が高めであるため，声帯疲労の可能性がある曲。コンサート開始直後に演奏するにはこの後の曲のペース配分が必要
			（解決策）	事前準備と当日のコンディションを万全にするのみ
11:10	**曲解説**	**（7分）**	**MC**	**山田耕筰　中国地方の子守歌　解説**
			内容	岡山地方の子守歌であるという解説。筆者自身が中国地方で生まれ育った幼少期のエピソードを話す
			目的	曲への理解とともに，自己紹介の延長を兼ねる
	日本歌曲②	**（3分）**	**歌唱**	**山田耕筰　中国地方の子守歌**
			内容	「子を抱く母親」としての多少の演技つきの演奏
			目的	①観客が穏やかに家族を思い起こす時間を提供 ②ホールコンサートの演奏曲としてのプレゼン効果を狙う
			（課題）	観客の家族の思い出にダイレクトに触れる可能性があり，場合によって感傷的になりすぎてしまう危険性がある
			（解決策）	演技が入ることで演奏者自身が感情的になりすぎないような演奏を心がける
11:20	**曲解説**	**（3分）**	**MC**	**山田耕筰　この道　解説**
			内容	明治期，北海道開拓時代の話という解説
			目的	曲理解
	日本歌曲③	**（2分）**	**歌唱**	**山田耕筰　この道**
			内容	演奏
			目的	①穏やかで美しい曲として非常に有名な曲を紹介 ②ホールコンサートの演奏曲としてのプレゼン効果を狙う
11:25	**雑談と解説**	**（5分）**	**MC**	**演奏者（筆者）幼少期のエピソードとみかんの花咲く丘曲解説**
			内容	静岡県伊東市の風景が題材となった曲であるが，瀬戸内にもみかん畑が広がり，筆者幼少期のみかん狩りのエピソード等を話す
			目的	リクエスト曲。コンサートプログラムも進行してきて，しばらくシリアスな内容の曲が続いたので一端緩和して場が和むようなフリートークを入れた
			（課題）	フリートークは長すぎると間延びするので注意。特に自身の体験談は長くなりがち
			（解決策）	フリーではあるが話す内容を大筋では決めておく
	日本歌曲④	**（3分）**	**一同歌唱**	**海沼実　みかんの花咲く丘**
			内容	観客へも歌唱参加を促した上での歌唱。会場を巡りながらの歌唱
			目的	リクエスト曲に応える。また歌唱参加しやすくする為，演奏者が歌唱しながら客席を回ることでアーティストを観客がより身近に感じることが出来る
			（課題）	リクエスト曲ではあるものの，ご自身で歌いたいと思われておられる方ばかりであるとは限らないため（曲・歌詞を知らない可能性がゼロとは言えない）全員参加は難しい
			（解決策）	歌詞については配布プログラムに歌詞を添付。会場が暗いままだと歌詞カードが見えないため，アーティストが客席を巡ることもあって，客席照明を一時上げていただいた

11：35頃	**オペラ事前説明**	**ＭＣ**	**私の大好きなお父さん　演技つき歌唱のための準備解説**
		内容	観客の男性一人（出来れば観客全員がその為人をよく知っている人物）をオペラ登場人物として登場させ，演技をつけて曲参加させる。オペラ場面の内容説明と，簡単な演技指導
		目的	①説明の中で対象人物と身近に話す様子を観客に見せることで，より観客とアーティストの心の距離感を縮める ②演技参加者の緊張をほぐしつつ内容を理解させる
	オペラ曲演奏	**歌唱**	**プッチーニ　オペラ“ジャンニ・スキッキ”より　～私の大好きなお父さん**
		内容	演技を伴う歌唱
		目的	観客の中の一人がオペラの舞台の世界に入っていく過程をみることで，舞台世界と観客自身の世界のボーダーが薄くなる感覚を与えることで，オペラ（＝クラッシック）は敷居が高いという意識そのものを覆すきっかけを与える。
		（課題）	①演技参加人物の性格や立場によって，反応が異なり，全く身動きが取れなくなる危険がある。 ②反面，過去事例として，参加者にとっさの演技に熱が入ってしまい演奏中に声を発してしまい，音楽とそぐわない現象が発生した（ｐｐのフレーズで声を荒げてしまった。演技者…日本語・演奏…イタリア語での言葉が混在してしまい，物珍しい光景に観客には好評であったものの，プッチーニの音楽そのもののスタイルが崩れてしまった）
		（解決策）	①演技上でアーティスト側からのわかりやすいアプローチをとり，父親役が動けないことが，かえって威厳に見えるような演技をアーティスト側が選択する ②事前の演技指導の中の注釈として音楽の中での最低限の決まりごとを伝えておく
	リクエスト曲歌唱	**簡単なＭＣ＋演奏**	**アメイジンググレイス**
		内容	歌唱
		目的	①リクエストに応える ②前曲で和らいだ雰囲気になったところで，再度しっかりした内容ある演奏の時間をとることで，身近に感じられる道筋をつけた上での本格的な歌唱をしっかりと堪能させる
	全体斉唱	**簡単なＭＣ＋全体斉唱**	**ふるさと**
		内容	全員で歌唱。歌唱に際して，歌詞を舞台前方に張出。歌唱中はアーティストは会場内を巡る
		目的	だれでも歌うことができ，歌詞もなじみのある曲を選択し，音楽に対するアプローチを聴衆から参加者へと導く

このアウトリーチで実際のプログラム曲目を決定する上で課題となったのが，ホールコンサートプログラムと重なる曲を用意せざるを得ない点であった。数日間連続して行われるアウトリーチとホールコンサートで用意できる曲数は都合上限られてくる。このアウトリーチの参加者は２日後に行われるホールコンサートの観客となってくださる可能性も大いにあり，同じ曲を同じ内容で見せたのではホールコンサートの新鮮な驚きを損ねることになるため，ホールコンサートで行う手法とは敢えて別の解説内容にして変化をつける工夫を加えた。

また，このアウトリーチの会場がホールコンサートと同じであるという点も，再度足を運んでくださる観客への配慮が必要であった。加えて，このアウトリーチの大きな目標である「親近感」を高める効果を狙うために会場客席を巡る演出効果を入れていることから，相乗効果を狙いとして，舞台を客席とフラットにし，舞台から一歩足をのばせばすぐに客席という，通常存在する舞台と客席の明確な境界線を視覚的に排除することにした（写真１参照）。これらの条件は，舞台面が可動式である多賀城市民会館の小ホールという会場であったからこそ可能となった，会場の特性を生かした舞台づくりとなった。

写真１　舞台と客席がフラットで近いセッティング（ＭＣ中）

写真２　私の大好きなお父さん演奏中　観客演技参加の様子

写真３　ふるさと斉唱中　観客全員が演奏参加する様子

上記プログラムにおいて，オペラの演技参加者には，当日観覧下さった多賀城市市長菊池健次郎氏にご協力いただいた。当日突然の協力のお願いにもかかわらず協力的に応じてくださる同氏のご様子に，会場は終始和やかな空気に包まれた（写真２参照）。

アウトリーチコンサート開始当初は緊張気味であった観客の表情も，１時間弱のプログラム終盤のふるさとでは，観客全員がふるさとを斉唱してくださった（写真３参照）。中には涙ぐまれる会員の方も見られ，音楽の持つ対人の距離を縮め心癒す力を肌で感じる瞬間は，筆者自身もいつも感動を与えられる。

このアウトリーチに関してのアンケート実施はなく，観客のクラッシックに対する認識の変化等についての報告が記録として挙げられないことは残念ではあるが，同事業の公共ホール担当者の方は以下のような報告をされている（報告書内容抜粋）。

参加者…成人50人

概　要…プログラムは山田耕筰の歌曲とリクエストのあった「みかんの花咲く丘」「アメイジンググレイス」のほか，みんなで歌う場面（ふるさと，みかんの花咲く…）もあり，和やかな雰囲気のコンサートになりました。また，「私の大好きなお父さん」では，会場に来ていた市長に父親役をお願いして場面を解説するなど，初めてオペラに触れた方にもわかりやすく，楽しいものと感じられたようです。[3)]

ホールコンサートのアンケート分析によると（後述），全体の観客の１割近くをこのいとぐるまの会員の方が占めて下さっていることは，コミュニティプログラムとしてのアウトリーチの成功の一例と言えるだろう。

(2)　恵愛ホームアウトリーチ

表５　恵愛ホーム概要と事前報告

恵愛ホーム　アウトリーチ		施設名：恵愛ホーム		下見日時：11/６(土)　10:00	
項　目	記　入　欄				備　考
内　容	タイトル	ミニコンサート～恵愛ホームの皆さんとともに			
	期　日	2011年１月20日(木)	時　間	14:30～15:20	
	対象（人数）	入所者（30～40人）	会　場	２Ｆ食堂	平均年齢84才 男女比＝３：７
ホームの雰囲気など	中庭を中心にしたドーナツ型の建物（２階建）で窓が多く開放的な雰囲気を感じる。職員の方々も明るく，開所（平成12年）からの職員も多く，入所者の方々とにぎやかに過ごしているとのこと。 ホーム内でのカラオケでは演歌・ポップス（坂本九の曲など）がよく歌われているそうである。				
担当者からの希望・要望など	60才代から最高齢104才までいる。童謡・唱歌など，入所者がわかる曲を入れて欲しい。 インフルエンザ等が感染症が流行している場合は中止させていただく。				

企画目標

対象者の大半（入所者・デイケアを受ける方々）は，実際にコンサートホールへ足を運ぶことが困難であるため，ホールコンサートの雰囲気を日常の場で体感していただくことを目標とする。身体を取り巻く環境（ケア･介護状況）は普段と同じという安心感を保ったままで，コンサートの非日常空間を一部味わっていただくこと，同時にホールコンサートでは不可能な身近な距離感でアーティストを感じていただくことを目指した。

上記の事前調査による報告打合せの結果立案の企画目標を柱に，実際に以下のプログラムを実施した。

表６　恵愛ホーム　プログラム

時間目安	内容				
14:30	**オープニング**	**（３分）**	**歌唱**		**早春賦**
				内容	季節にあった曲
				目的	コンサートオープニングに，自己紹介も兼ねた演奏
	自己紹介	**（２分）**	**ＭＣ**		**自己紹介と共演者の紹介**
				内容	簡単な自己紹介
				目的	演奏のみでなく，話すことでアーティスト（筆者･共演者）の為人を知ってもらい観客の側の緊張を緩和する
14:35	**曲解説**	**（３分）**	**ＭＣ**		**蝶々夫人“ある晴れた日に”についての簡潔な解説**
				内容	日本が舞台になったオペラである，という程度の簡単な解説
				目的	多少の曲理解を促すためだが，オープニングまもなくの自己紹介を兼ねた曲でもあるので，長くなりすぎない簡潔なものとした
	日本歌曲①	**（７分）**	**歌唱**		**プッチーニ　オペラ“蝶々夫人”より　～ある晴れた日に**
				内容	演奏
				目的	曲理解よりも，本格楽曲により楽器としての声を出してまずひきつける
14:45	**曲解説と演奏**	**(30分)**			**山田耕筰歌曲作品　～こうさく少年のおはなし～** **１．赤とんぼ　２．中国地方の子守歌　３．からたちの花** **４．待ちぼうけ　５．鐘が鳴ります　６．この道**
				内容	山田耕筰の日本歌曲作品の曲間に，筆者自作の物語形式での曲解説を入れながらの演奏
				目的	曲理解を解説ではなく，物語形式とすることで観客により感情移入しやすい曲鑑賞の楽しみ方のひとつを提案する
				（課題）	物語の進行に曲を使用することで，観客の中の曲のイメージを固定してしまう危険性がある。また，実際の作曲経緯とは異なる使い方をしている曲もあり，曲知識が間違って刷り込まれてしまう危険がある
				（解決策）	演奏を始める前後に注釈を入れ，物語はあくまでフィクションであることを伝えておく
15:15	**MCと全員斉唱**	**(10分)**	**簡単なＭＣ＋全体斉唱**		**みかんの花咲く丘，ふるさと**
				内容	曲についての紹介後，全員での斉唱
				目的	演奏しながら会場を巡り入所者のそばによって話しかけるように歌うことで安心感を与えながらの癒しの時間を感じていただく
	お礼のご挨拶	**（５分）**	**ＭＣ**		**ご挨拶**
				内容	演奏を聴いてくださったことへの感謝と入所者に向けてのメッセージ
15:30					終了後，会場に残り入所者と話し触れ合う時間をとる

このアウトリーチは，日常空間の中でコンサートという非日常空間を体感していただくことをプログラム立案の主軸とした。このため，衣装・選曲とも，ホールコンサートプログラムの第１部そのままのプログラムを中心にすることにした。事前のご依頼内容として童謡・唱歌を入れてもらいたいというご要望は，まさに今回のホールコンサートプログラム第１部の内容と合致していた。また，この創作物語の，登場人物の人生をなぞっていく様子は，対象者自身

の人生歴をたどる，高齢者の心理的な安定を高める回想法という心理療法の要素も期待できる。さらに続けて，対象者自身も一緒に歌うこと，声を出すことによる身体機能への働きかけを行う参加型プログラムを取り入れた。この際の歌唱は，音程やタイミングも整わない場合が多く，クリニック型の参加型プログラムと違い，高度な音楽性を体感することは難しい。しかし，プログラムの目的は常に同じではなく，対象者の年代や状況に応じて設定すべきであると筆者は考える。むろん，筆者はカウンセリング療法の為に演奏を行うわけではなく，あくまで演奏者の立場としてこのプログラムを実施するものである。音楽を手段として使用し，相手とのコミュニケーションを図る時間とする，というのも，アウトリーチの役割の一つではないかと考察する。

写真４　対象者と共に歌う様子。高齢者対象の場合，通常の歌唱よりもテンポを遅めにして歌い，ブレスタイミングも長めにとるなど，対象者の身体条件も考慮に入れた演奏とする

写真５　コンサートプログラム後，感想を述べられる入所者の方

写真６　コンサート後の談話の時間。入所者・デイケアの方々と共にお茶を頂きながら談笑する時間。音楽によるアウトリーチ時間は終了しても，演奏家として対象者と身近に接する時間は続く。

同事業の公共ホール担当者の方の報告は以下の通り（報告書内容抜粋）。

参加者…70人
概　要…こうさく少年のお話を中心としたプログラム。「赤とんぼ」では乗松さんの歌に合わせて口ずさむ声がきこえてきた。歌声に誘われて途中から参加した方もだいぶおり，最後に一緒に歌った「ふるさと」では寝たきりの方も声を出して歌い出し，歌の力を実感した。ミニコンサート後，おやつを食べながら交流の時間を持ちました。[3)]

対象施設によっては，事業の主目的の一つであるホール観客・利用顧客の増加には直結しないアウトリーチも存在する。しかし，直接のホール利用でなくとも，その地域に生きる音楽家のための次の機会を生み出すきっかけとしての効果は十分期待できる。こうした小さな流れがやがてホールとアーティストたちを中心とした音楽活性化の道へとつながっていく。

(3)　八幡小学校アウトリーチ

表７　八幡小学校概要と事前報告

多賀城八幡小学校　６年生アウトリーチ		学校等名：多賀城八幡小学校		下見日時：11/５(金)　15:00(予定)	
項　目	記　入　欄				備　考
内　容	タ イ ト ル	八幡小学校ミニコンサート＆ワークショップ			
	期　日	2011年１月21日(金)	時　間	①11:20～12:05 ②13:50～14:35 ③14:45～15:15	
	対象（人数）	①６年１組(34人) ②６年２組(34人) ③合同ワークショップ	会　場	音楽室	
学校の校風 雰囲気　など	感動と感化あふれる学校（今年度のスローガン） ６年生はパワフルで，元気でにぎやかな子供たちだそうです。 音楽室は階段状の構造で，大学の講義室のような固定席です。宮城県には作曲コンクールというものがあり，５，６年生の希望者が参加しているようです。音楽室及び控室にはヒーターがありますが，廊下やトイレはかなり冷えると思われます。校舎のすぐそばに高速道路がありますので，多少音が気になるかと思われます。				
担当先生からの 希望・要望など	卒業式に「この星に生まれて」「旅立ちの日」を二部合唱で歌うことにしている。今年度の６年生は音はとれているが声が出ないのでそこを何とかしたいと思っている。子どもたちに２部合唱の楽しみ，達成感を味わわせたいので，ステップアップのきっかけ・アドバイスをしていただきたい。 ③ワークショップ（20分程度）14:45-15:15 校歌の伴奏のみのテープを諸行事で使っているが，以前から歌入りものを録音したいと考えていた。歌い方の指導をしていただき，子どもたちの声で録音したい。				

企画目標

小学校児童対象のアウトリーチ，大きく以下の２点にターゲットを絞った

目標①　クラッシック音楽の敷居を下げた楽しみ方を知る

目標②　依頼いただいた卒業式で演奏するの曲の音楽的な愉しみを知る

企画立案に際し，目標②の卒業式演奏予定曲「旅立ちの日に」「この星に生まれて」２曲両方扱うにはアウトリーチ１枠45分という時間では，目標①との両立は時間的に困難と思われた。かといって，①を捨ててしまい完全な合唱ワークショップにすることは，筆者のアーティストとしての特性から離れ合唱指導の時間となり，出張授業と化してしまい，アーティストとしてではなく，合唱指導講師を前に子どもたちが「勉強する時間」となってしまうことは避けたかった。筆者がアウトリーチ実施の上で最重要に自身に課していることは，「音楽の先生」ではなく「アーティスト」として対象者に接することである。無論，講師としてワークショップ型のアウトリーチに臨むのに適したアーティストも多く存在し，実際筆者も教育現場に携わる一員であり，合唱講師としてアウトリーチを行うことも可能ではある。しかしアウトリーチという形式をとる際，自身の個性や特性を考えると，自らが望む役割と自身の適性は「音楽の愉しさを普及すること」としている。

今回，役割を実現するのに最適な手段は，「指導」ではなく「音楽の遊び方を共感すること」を選択した。また，凝縮した内容を目指し，対象曲は「旅立ちの日」のみとした。

この上で，目標②となる卒業式で歌う２部合唱曲の愉しみ方を知るプログラムを考案する為に，筆者が考える「合唱の愉しみ」とは何かを例に挙げてみた。

・ハーモニーの交わる楽しさ

・アンサンブルの掛合，ユニゾンになった時の一体感

企画立案当初，上記２つの例を体感できる２種類のプログラムを用意した。

案１　ハーモニーを愉しむ

１．長３和音・短３和音を提示してその印象を色で例えてみる
（該当年代の子どもたちにとって，筆者の過去のアウトリーチの体験上，形容詞表現は出て来づらいと感じている。よって，色，形の具体的な表現方法を提示する）

２．長・短の混在するカデンツを聞かせて色の変化を考えさせる

３．色の変化から想像される物語や風景をその場で創作

４．実際にそのカデンツを歌わせる（色・風景を想像させながら）

５．依頼曲のハーモニー部分を分析・想像の上で演奏

案２　アンサンブルの掛合とユニゾンの一体感を愉しむ

1．曲の２部合唱となる部分のみ取り出し，振付する
2．振付する内容は，掛合する部分は手を挙げ，タイミングが重なる２部合唱では互いの手を挙げた状態で合わせる。最後のユニゾン部分は全員で両手を挙げて終わる，という単純な動き
3．見本を見せながら，パートに分かれて児童も共に動きのみ練習
4．動きをつけながら歌ってみる
5．動きなしで，音のみでその動きを表現しながら歌う

双方のプログラムを同時で行う可能性も考えたが，案１は実際の依頼曲に話題が至るまでに時間を要し，対象児童の発想力に頼る部分が大きい。これは，対象児童の想像力をかきたてる興味深いプログラムではあるが，個人差のある彼ら自身が個々に考え，一定の感想とアイディアを自分たちなりに固めていくにはある程度の時間が必要であると思われた。今回のプログラム全体の中で合唱曲に割り当てた時間配分の短さを考慮の上で，最終的に案２の動きから知る音楽表現の愉しみを組み入れたプログラムを選択した。

現地入り後のリハーサルでこの曲の振付を同行コーディネーター山本氏らに確認していただいたところ，６年生児童という年代を考慮すると，異性との接触となる“互いの手を合わせる”という行為に児童らが戸惑ってしまう可能性を指摘くださった為，手を合わせることから手で相手を指し示す動きへと改善を加えた。

これらを踏まえて以下のプログラムを実施した。

表８　八幡小学校プログラム

時間目安 ①	時間目安 ②	内容			
11:20	13:50	**オープニング**	**（3分）**	**歌唱**	**ビゼー　オペラ“カルメン”より　～ハバネラ**
				内容	カスタネットを使用しての歌唱
				目的	コンサートオープニングに，自己紹介も兼ねた演奏
		自己紹介	**（2分）**	**ＭＣ**	**自己紹介と共演者の紹介**
				内容	簡単な自己紹介。出身地広島の話等
				目的	演奏のみでなく，話すことでアーティスト（著者・共演者）の為人を知ってもらい観客の側の緊張を緩和する
11:25	13:55	**曲解説**	**（7分）**	**ＭＣ**	**オペラについてのお話，演技参加者への簡単な演技指導**
				内容	観客の男性一人（出来れば観客全員がその為人をよく知っている人物）をオペラ登場人物として登場させ，演技をつけて曲参加させる。オペラ場面の内容説明と，簡単な演技指導
				目的	①説明の中で対象人物と身近に話す様子を子どもたちに見せることで，より観客とアーティストの心の距離感を縮める ②演技参加者の緊張をほぐしつつ内容を理解させる
		オペラ曲演奏	**（3分）**	**歌唱**	**プッチーニ　オペラ“ジャンニ・スキッキ”より　ラウレッタのアリア～私の大好きなお父さん**
				内容	演技を伴う歌唱
				目的	よく知っている人物が中の一人がオペラの舞台の世界に入っていく過程をみることで，舞台世界と観客自身の世界のボーダーが薄くなる感覚を与えることで，オペラ（＝クラッシック）は楽しいジャンルであるということを知ってもらう
				（課題）	①演技参加人物の性格や立場によって，反応が異なり，全く身動きが取れなくなる危険がある。 ②反面，過去事例として，参加者にとっさの演技に熱が入ってしまい演奏中に声を発してしまい，音楽とそぐわない現象が発生した（ｐｐのフレーズで声を荒げてしまった。演技者…日本語・演奏…イタリア語での言葉が混在してしまい，物珍しい光景に観客には好評であったものの，プッチーニの音楽そのもののスタイルが崩れてしまった）
				（解決策）	①演技上でアーティスト側からのわかりやすいアプローチをとり，父親役が動けないことが，かえって威厳に見えるような演技をアーティスト側が選択する ②事前の演技指導の中の注釈として音楽の中での最低限の決まりごとを伝えておく

11:35	14:05	**ワークショップ （20分）**	**音楽であそぼう！　～旅立ちの日に（リクエスト曲）**
		内容	曲の中で２部合唱に分かれている部分に動きを付けて，合唱する
		具体的な方法	２部合唱合いの手を入れるように歌う部分はそれぞれ自分が歌う時に手を挙げ，相手と同時に歌うときはお互いの手を合わせる
		目的	①掛け合い部分とアンサンブルする部分の動きによる可視化で合唱の醍醐味である掛け合い・アンサンブルのパートが曲のどこにあたるのかを体感する ②最終的には動きなしで音でそれが表現出来るように導く
		（課題）	①子どもたちが曲を暗譜してあることが必要 ②会場となる音楽室が座席固定の教室であるので，動きを付ける上でスペースの制限がある
		（解決策）	①事前調査で確認済み　※注　実際の実施時に出来ていなかったことが判明 ②制限された空間でも出来る動きを提案
11:55	14:25	**オペラ事前説明 （３分） ＭＣ**	**ある晴れた日に　解説**
		内容	曲の内容については，日本が舞台になったオペラであるという程度の話。内容以上に，声を楽器として使用する歌の特性を生かし，身体の動き，演技等すべて含めてどこから観察しても OK であると案内する
		目的	曲の鑑賞のみではなく，楽器として身体を使うことを間近で見てもらうための案内 案内に際し，演奏の妨げになる動き（身体や鍵盤に触れる）はしないという約束の元，さまざまな角度・距離感で聞いても可能であると許可
		オペラ曲演奏　（７分） 歌唱	**プッチーニ　オペラ“蝶々夫人”より　～ある晴れた日に**
		内容	演技を伴う歌唱
		目的	声楽家が楽器として身体を使う時の動きを見せる。どれぐらい体が動いているか，ピアノとどうやって呼吸を合わせているか，など，普段のコンサートではもてないの楽器との距離感で演奏を聞かせる機会とする
		（課題）	子どもたちが視覚的要素にとらわれ，曲そのものへの鑑賞度が薄れる可能性がある
12:05	14:35	（解決策）	視覚的な満足を得，さらに音楽へも再度集中力の向けられる長さの曲を選曲

③	14:45	**ワークショップ （10分）**	**うたう前に**
		内容	声を出す前の発声練習代わりの体を動かす運動
		具体的な方法	校歌の音に合わせた手遊びによる，隣り合わせのお友達とのコミュニケーション
		課題	対象人数がアウトリーチ時の倍（70名弱）になったことで，動きに対して起こった子どもたちの反応に対応しきれなかった。ひとりの対応で，アウトリーチプログラムとしてコミュニケーションをとれる人数・内容には限界があると知った
	14:55	**録音　（20分）**	**校歌録音**
		目的	学校希望，平素の校歌指導で使用する録音資料作成
		方法	子どもたちの合唱とアーティスト歌唱参加による校歌録音。伴奏はアーティスト共演者，指揮は同小学校音楽の先生 実際の曲の中での歌唱指導は直接は行わないが，先のアウトリーチの中で行ったアンサンブルになる部分の曲のイメージのとらえ方を数か所取り出して実演の後，演奏

15:15　**全プログラム終了**

写真７　カスタネットに興味を示す子どもたち（オープニングハバネラ演奏後ＭＣ自己紹介の中で）

写真８　午後のクラスでは，担任が男性の先生であったため，演技参加をお願いした。学校の中の子どもたちにとって最も身近な存在である担任の先生がオペラの世界に入っていく様子に子どもたちは沸き立った。音楽＝楽しいという雰囲気づくりに大いに貢献いただいた。

プログラム中に表記の通り，アウトリーチが始まり，合唱曲のミニワークショップの時間が始まると，子どもたちはざわめいた。事前調査では２部合唱曲は両パートとも音が取れている，という報告であったが，子どもたちは実際にはまだ音をとり始めて間もない時期であった。

アウトリーチ実施の上で，このようなアクシデントの可能性はゼロではないにせよ，予定通りの案２のプログラムを実施するか，案１に変更するか，あるいは歌唱可能な別の曲を演奏して予定時間を埋め合わせるか，子どもたちを前にして咄嗟の判断が要求される場面となった。

案１は準備万端な段階とは言えず，アウトリーチ現場で発展させながら強行するにはリスクが高い。また，別の曲の演奏は，プログラムの時間進行上の体裁を整えることは可能だが，依頼内容，さらにこのアウトリーチの目標である卒業式の歌の愉しみ方を体感させることが叶わなくなる。以上の観点から，十分に音が取れていない状態なりに予定通りのプログラムを行うことにした。

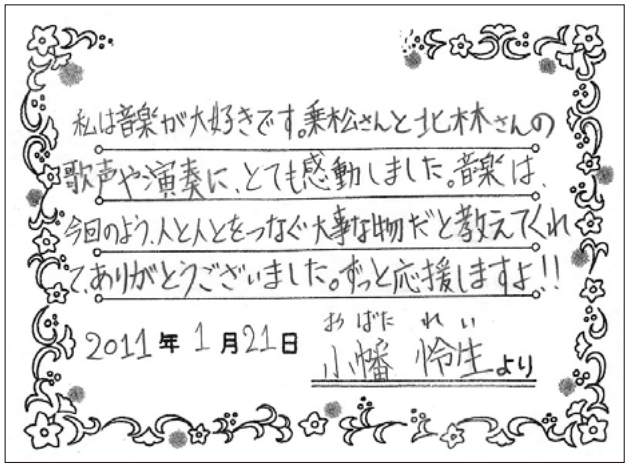
写真９，10　楽譜を持ちながら，動きを実演する子どもたち。暗譜はできていなくても，何度も歌うことで動きを伴いながら暗譜することに成功し，子どもたちの達成感という点では，状況を逆手に取ることができた。

写真11　さまざまな場所から演奏を聴く子どもたち

同事業の公共ホール担当者の方の報告は以下の通り（報告書内容抜粋）。

参加者…６年１組（34名），６年２組（34名）
概　要…オペラの曲と要望のあった「旅立ちの日に」（二部合唱）を行いました。「ハバネラ」を歌いながらの登場に子ども達は目を見張り，他の曲でも歌声と表現力にひきつけられていたようです。「旅立ちの日に」はパートに分かれて自分が歌う部分は自分の胸に手を，相手が歌う部分では相手に手を差し伸べる動きをつける予定でしたが，曲の練習が不十分だったことから，急遽やり方を変えるなど乗松さんにはご苦労をかけてしまいました。午後からのアウトリーチでは１組と同じ内容ですが，反省をもとに「旅立ちの日に」ではスタッフも歌に加わり，手の動きや下のパートを応援したことで児童も戸惑うことなく取り組むことができたようでした。１組とはクラスの雰囲気も違い「私の大好きなお父さん」では担任がお父さん役で熱演し，大変盛り上がりました。活動のまとめとして２クラス合同で校歌の録音を行いましたが，時間が長くなり，アクティビティの余韻を消してしまい残念に思いました。[3)]

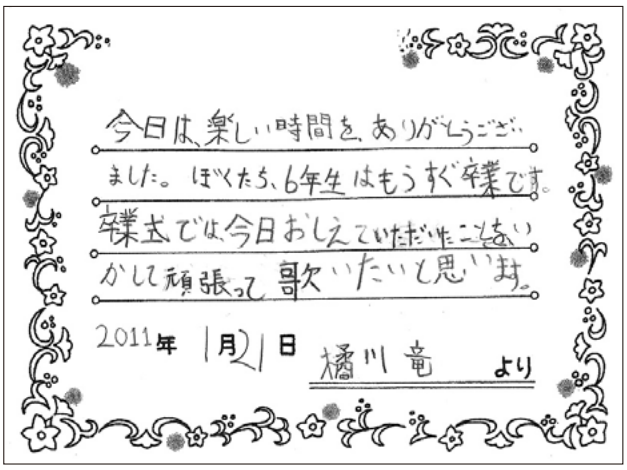
今回のアウトリーチに際し，子どもたちから多くの感想を頂いた中から，何点か紹介する。


私は音楽が大好きです。乗松さんと北林さんの歌声や演奏に、とても感動しました。音楽は、今回のよう、人と人とをつなぐ大事な物だと教えてくれてありがとうございました。ずっと応援しますよ!!
2011年1月21日　小幡 怜生（おばた れい）より

この事業のほんの数か月後，東日本大震災が起きた。多賀城市は津波被害も大きく，このアウトリーチ先となった八幡小学校も校舎が津波による浸水で被災した。子どもたちの待ち望んだ卒業式は延期されることになったが，数か月後に無事に行われたそうである。混乱の中でようやく行われたであろう式で，アウトリーチの日に経験した音楽の愉しみをどれぐらいの子どもたちが覚えていてくれたかどうかはわからないが，おそらく彼ら自身の経験からあふれる思いで，素晴らしい演奏だっただろう。

一声楽家として，歌唱表現において最重要なことは，発声上の技術ではなく，歌詞という「言葉」をいかに自身の実感として音楽と共に語ることが出来るかだと筆者は考えている。このことは，本学で声楽の教鞭をとる上で常時学生達に伝えていることである。

音楽の素晴らしさを体感する喜びは，専門教育を受けた人間だけが享受するものではなく，誰しも感じることが出来る可能性を持っているのである。これこそが専門音楽教育を受けた我々が文化権普及に向けて果たすべき説明責任であろう。


今日は、楽しい時間を、ありがとうございました。ぼくたち、6年生はもうすぐ卒業です。卒業式では今日おしえていただいたことをいかして頑張って歌いたいと思います。
2011年1月21日　橘川竜　より

(4)　ホールコンサート実践報告

表９　ホールコンサート概要

コンサート チェックシート

項　目	記　入　欄					
①開催データ	公演名	乗松恵美ソプラノリサイタル				
	開催日	2011年１月22日(土)	会場	市民会館　小ホール	客席数	458
	開場時間	13:30	開演時間	14:00	終演時間	16:00
②ピアノ調律	使用ピアノ	スタインウェイ	型番	D274	ピッチ(Ｈｚ)	442
	調律依頼	済	調律実施日	１月22日	調律実施時間	８:30
	調律会社	ヤマハ	担当者(連絡先)	深谷	tel　090-3364-6509	
③スケジュール	会場入り時間	11:00	前日までのリハーサル	可	当日リハーサルの時間	11:00～
④舞台	反響板	有	楽屋部屋数	4	アナウンス	有
⑤舞台スタッフ	進行担当者	瀧口	照明担当者	東北共立	音響担当者	東北共立
	録音	有	録画	無	写真撮影	有
⑥客席スタッフ等	受付・当日券担当者	本郷	チケットもぎり担当	横田	楽屋・ケータリング担当	佐藤（祐）
	物販	無	配布プログラム	有	終演後サイン会	未定
	物販担当者		作成担当者	瀧口	サイン会担当者	未定
⑦内容（進行）	予定時間	演奏曲目				
	13:30	開場				
	14:00	開演				
		Ｍ１	赤とんぼ			
		Ｍ２	中国地方の子守唄			
		Ｍ３	からたちの花			
		Ｍ４	待ちぼうけ			
		Ｍ５	鐘が鳴ります			
		Ｍ６	この道			
	休憩	15分間				
		Ｍ７	歌劇「フィガロの結婚」より序曲（ピアノソロ）			
		Ｍ８	「とうとうこの時が来た」			
		Ｍ９	歌劇「ジャンニスキッキ」より「私の大好きなお父さん」			
		M10	歌劇「カルメン」より「ハバネラ」			
		M11	３幕間奏曲（ピアノソロ）			
		M12	歌劇「椿姫」より「さようなら，過ぎ去った日よ」			
		M13	歌劇「蝶々夫人」より「ある晴れた日に」			
		花束贈呈				
		アンコール	さとうきび畑 ピエ・イエズ			

前半プログラムについては，親しみやすく聞きやすいクラッシック曲のプログラム提案ということで筆者創作の物語に山田耕筰の歌曲を組み合わせた30分弱のプログラムを演奏した。後半プログラム企画立案時には，いくつかアイディアがあった中で，会場の条件と準備できる道具・資料等の関係から，「オペラの中に登場するさまざまな女性像」と題し，オペラアリアのガラコンサートプログラムとなった。間に解説を入れながらの演奏で，オペラに登場するさ

まざまなキャラクターを演じ分けしながら歌い分けるという，筆者のこれまでのオペラ演奏歴とも言えるプログラムとなった。

同事業の公共ホール担当者の方の報告は以下の通り（報告書内容抜粋）。

対　　象…多賀城市内一般市民
入場者数…173名
概　　要…ソプラノリサイタルそのものがなじみのない土地柄で集客には苦慮しましたが，アクティビティ参加者の反応は大変良く，もう一度聴きたいと足を運んだ方が多くいました。１部は山田耕筰歌曲集「こうさく少年のお話」，語りと歌に自分の思い出を重ね合わせ涙する姿も見られました。２部はオペラアリア集。それぞれのアリアが歌われる場面を楽しく，わかりやすく解説し，豊かな表現力で会場を魅了していました。[3)]

コンサートで実施されたアンケート結果
入場者173名　回収102件

図１；男女比

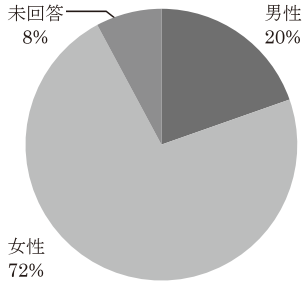


図２；年代比

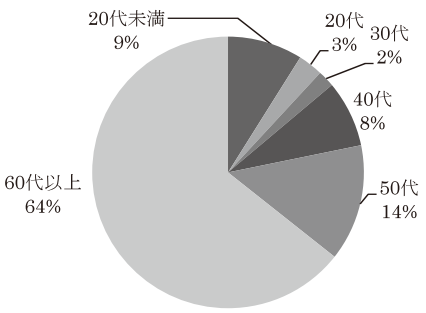


図３；居住地

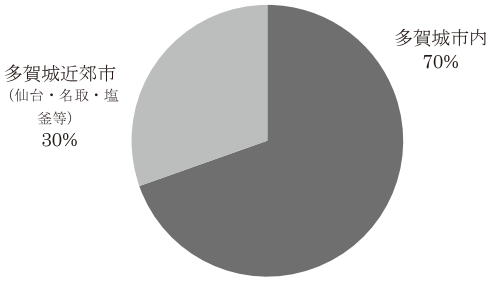


図４；告知手段

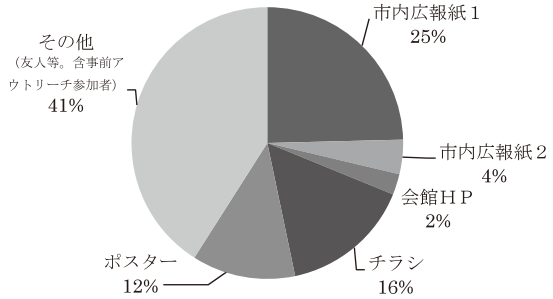
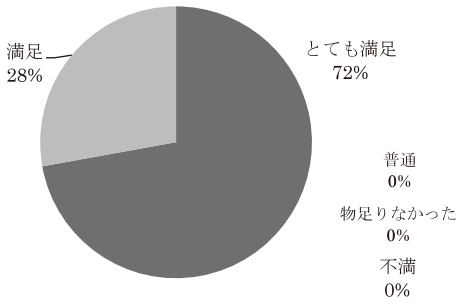


図５；満足度



アンケート結果等から推察されるホールコンサートに対する４件のアウトリーチの直接的な集客効果については，やはり微弱と言えるかもしれない。

多賀城市の平成20年度調査による総人口は63000人，うちクラッシック愛好者人口を１％と想定して630人，当日の入場者173名，多賀城市のクラッシックファンの１/４がこのコンサートに足を運んでくださったことになる。実施地域住民にとって，地域に何の所縁もなく，かつ全国的に名を知れた音楽家とも言えないアーティストのソロリサイタルにこの人数が来場くださったのは，大きな価値があることであると言えよう。

5．全事業を終えて

アウトリーチ活動の成果は常に，集客上の即効性があるものとは言い難いのは事実である。なればこそ，対象地域での継続的な活動が必要であり，派遣アーティストの役割は，活性化へのスタート地点に過ぎない。

以下は今回の全事業終了後の，多賀城市民会館担当者の報告である。

全事業を終えて（多賀城市民会館　瀧口光江氏）

まず，介護している方々の団体などの情報がなかったこと，学校でやる場合，最大２クラスの予定なのでどのような方法で募集または依頼したら良いか，また少人数でやることの意義をいかに理解していただくかに苦労しました。その際，介護福祉課と学校教育課に相談し，アウトリーチのねらいにあった団体・小学校を紹介していただきました。小学校からは人数が少ないので１学年（70人）ずつ２学年に聴かせたいとの要望もありましたが，アウトリーチについて説明し，６年１組，２組を対象とすることで了承していただきました。

寝たきりの方が「ふるさと」を歌っている姿や男の子も女の子も目を輝かせて乗松さん歌を聴き，表情に見入っている姿を見て，音楽（歌）の力，すばらしさを改めて感じました。コンサートでも歌を聴きながらうなずき，涙する姿，そして「ありがとう」「ぜひまた来てくださいね」と笑顔で会場を後にする皆さんには乗松さんの歌を通して元気になって欲しいという思いは届いたのではないかと思います。またアクティビティ先の方々やコンサートのPRで地元の合唱団と関わりが持てたことも成果のひとつです。

今回の反省点として小学校で曲の練習がほとんどなされていなかった点が挙げられます。直接訪問（４回）したり，電話で打ち合わせを行いましたが，担当が教頭先生で，個別研修以外，担任の先生と直接打ち合わせをしなかったことが原因でした。６年生担任のリクエスト曲だったので直接打ち合わせをし，どの程度歌えるようになっているかを確認し，アーティストに伝えるべきだったと反省しています。

今回の事業を通して，建物は知っていてもホールが何をしているのかわからない方が多いと感じました。演奏家や職員が外に出ることで音楽の素晴らしさを感じるとともにホールに関心を持ってもらえたと思います。ホールが市民にとって楽しく，わくわくする場所になるために，とにかく一度ホールに来て演奏を聴いてもらうこと，満足して帰られたお客さまがリピーターになるよう良質な催しの企画を常に考え，継続していかなければならないと思いました。[3)]

おんかつ事業基本理念（前述）の中で特に，「地域の団体や施設，住民との新たな回路を構築すること」「コミュニティプログラムとコンサートを効果的に連携させること」に貢献出来たようである。

Ⅲ．まとめ

前章での平成22年度おんかつ事業を通して，最終的なホールコンサートプログラムを視野に入れた上での対象者別アウトリーチプログラムという経験を筆者は得た。対象者別のプログラム考案は個人的にアウトリーチを行う際にも経験するものだが，音楽によるアウトリーチの最終目標のひとつである「音楽の楽しさを知った人々がコンサートでホールに集まる→音楽を通した地域活性化」を直接目指す公共事業の一環となる，ここまで大規模なアウトリーチは，筆者にとって初めての経験であった。それは地域での音楽活動に必要な配慮や準備，また意義を，演奏家以外の視点をもつ他者から得ることができる非常に貴重な機会である。ただこの事業に参加した筆者なりに感じる課題としては，クラッシック音楽普及と地域活性化への寄与という観点からは，継続したプログラム実施が望まれるが，この規模の事業を公共施設が日常的に多数行うことは困難と思われる。それでは，演奏家個人が行うことが可能かというと，実際に複数のアウトリーチ実施先の開拓および交渉，プログラム実施のためのスタッフ手配等の多岐にわたる事務処理作業ひとつを挙げても不可能であろう。その中で，（財）地域創造の「おんかつ事業」が10年以上継続しているという事実は，その価値が非常に高く評価されている証と言えよう。しかし，「おんかつ事業」はあくまで音楽による地域活性化のスタート地点であり，その後の歩みは，この事業で培われたノウハウを元に公共ホールと地域のコミュニティ，またそこに生きる演奏家も含めて成長を目指していくべきと考察する。

今回の事業を通し筆者自身が得たものは，自

身の現在の年齢を考慮に加えたより深い自己理解，対象者に合わせた演奏とコミュニケーションを併せた，観客への新しいプレゼンテーションの方法考案に挑戦する力であった。複数プログラムの演奏を準備しリハーサル後に修正点を加えて本番を実施するには，演奏クオリティが納得いくレベルで準備できる曲数と演奏体力の上限を想定する必要がある。また，声楽という分野上，身体を楽器とする声楽の特徴として，加齢から来る筋力低下の楽器への影響は他の楽器以上に深刻なものであり，コミュニケーション上必要なトークと，楽器として声を扱う歌唱と，同じ声帯という器官を使用する上で疲労への配慮は不可欠であった。これらは，自己の楽器の現状を理解し，考慮の上のプログラム配分の能力に他ならない。また，音楽以外の深い知識を持つ他者からの意見を聞きながらプログラムを同時進行で進化させていくことができたことも，大きな価値がある経験となった。この機会で得た経験は，本学での授業を実施する上で，非常に貴重な研修機会となった。現在（平成23年時点）国内で唯一，アウトリーチを必修カリキュラムとし，地元広島に音楽という一面から活性化を促すという本学への社会的な期待は大きい。今後も研究課題としていきたい。

引用文献

1）文化芸術振興基本法
2）楠瀬寿賀子，津村卓，児玉真，中村透，丹羽徹　共著『おんかつハンドブック』ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室編，財団法人地域創造発行，2008
3）多賀城市おんかつ事業報告書

参考文献

1）的場康子『ライフデザインレポート　アウトリーチ活動の意義・課題についての一考察　現代における芸術文化の社会的役割』第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部，2003，p 26-35
2）児玉　真『アウトリーチ研修資料　演奏家のための音楽アウトリーチのはなし』安芸区民文化センター主催事業，2008